HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	スロバキア人とユダヤ人の協力と抵抗 … ハナ・クバートヴァ
著者	木村，和範；KIMURA，Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集，70(4)：217-230
発行日	2023-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《翻訳》

スロバキア人とユダヤ人の協力と抵抗[(1)]

ハナ・クバートヴァ*
木　村　和　範**（訳）

1．二種類のスロバキア人
2．それで，誰がパルチザンだったのか

ブラチスラバ出身の建築家フリッツ・ヴェインヴルム（Fritz Weinwurm）が絵筆をとった最後の『スロバキア・ユダヤ年鑑』（1940年）の表紙には，大地から枝を伸ばす木の幹が描かれている[訳注]。木そのものは根のすぐ上から切られているが，その切り株からは8本の枝が伸び，さらにその下には花が8輪咲いている。木は死んでしまったが，それでも生き続ける別の方法がある。表紙の絵が発す

（1）本稿は，チェコ科学財団（GAČR（Grantová agentura České republiky））の助成によるチェコ・カレル大学社会科学部の研究プロジェクト「チェコ人，スロバキア人，ユダヤ人 ── 離れてはいても共にあって」（課題番号 13-15989P）の研究成果の一部である。

［原典の書誌情報は以下のとおり。Hana Kubátová, “The Concepts of Collaboration and Resistance in Slovak-Jewish Relations,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide* (*Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015*), pp. 110–123. ジリナにおけるこの研究会の主催団体は International Christian Embassy Jerusalem と Historical Institute of Slovak Academy of Sciences であり，研究会の開催と論文集の刊行には Conference on the Jewish Material Claims to Germany からの助成を受けた。訳文中の［　］内と各章の番号付けは訳者による。脚注 19 など，訳者の照会により加筆された箇所がある。翻訳出版は原著者の許諾済み。］

＊Hana Kubátová, Institute of Political Studies, Faculty of Social Sciences, Charles University, Prague, Czech Republic.
＊＊本学名誉教授

［訳注］以下は最後の『スロバキア・ユダヤ年鑑』（1940 年）の表紙である。5700 年はユダヤ暦。

（出所）Kedem (auction House), https://www.kedem-auctions.com/en/content/yearbook-slovakian-jews-1940, accessed on September 13, 2022.

るメッセージはこういうことなのであろう。巻頭言の趣旨も同様で，次のように書かれている。「ユダヤ人コミュニティの歴史の中で，今日ほど困難で重大な課題に直面したことはない。…… 思考と感情を順応させなければならない変動の渦中にあって，我々は，持てる力と手段のすべてを動員して未来をより良いものにしようとしている。ユダヤの永遠なる価値を追求し，その水源に至る道を辿って行かなければならない。今肝に銘じてそうするならば，労働に勤しむ我々はきっと新しい道を心豊かに歩んで，スロバキアを我が祖国と認めることができるようになるであろう。」(2) ダヴィッド・グロス（David Gross）が編集したこの号の巻頭言は，「衣食住をことごとく奪われて，酷い打撃を受けている…… 今日のユダヤ人の困難な状況」を嘆いているが，それと同時に，スロバキアのマイノリティであるユダヤ人にたいして考え方を省みて新しい状況に適応し，国家にたいして責任ある行動をとるようにと呼びかけている(3)。それから 30 年以上が経過して，ユダヤ人宗教団体中央連合会（Ústredný zväz židovských náboženských obcí: ÚZŽNO）の議長を長く務めたベンヤミン･エイヒラー（Benjamin Eichler）（在任 1955 年～1972 年）は，その未公刊の回顧録の中に，この巻頭言（ドイツ語訳）を収めていることが分かった。ドイツ語に通じていなかったエイヒラーは，英語で「沈黙が勝ることもある。」と注釈をつけた。しかしながら，戦時中のユダヤ人センター（Ústredňa Židov）のある種の行為にたいして批判的であったエイヒラーは，「人々には真実を伝え，事実に即して状況をもっと説明し，真の危険に注意を向けるほうが有意義であり，そうすれば（おそらく）救出された人の割合はもっと高かったであろう。」と考えていた(4)。

エイヒラーの回想録にはスロバキア語版，ドイツ語版，英語版があるが，それはいくつかの理由から非常に興味深い資料である(5)。「あの時代を生き抜いた者として，観察者として，あるいは直接の目撃者として，その経験を語る者」の視点で書かれているからである(6)。出版済みか未公刊かを問わず多くの回想録は，いきおい戦時下の出来事とかホロコーストとかに焦点を当てているが，それとは対照的に，1945 年 4 月にブラチスラバで再興されたユダヤ人宗教団体の創設者の一人であるエイヒラーは，戦後の回想に大部分を割き，「私の著作の目的は，この時代（1945 年～1972 年，そしてそれ以降）における重要な局面について，そのポジティブな側面だけでなく，ネガティブな側面をより多く捉えることにある。」(7) と述べている。少なくともう一つの理由から，エイヒラーの回想録は興味深い。エイヒラーは，私の研究対象であるスロバキア人とユダヤ人の関係を含む過去の事象を，受け身であった者の出来事としては記述していないからである。エイヒラーの考えでは，ホロコーストはたまたま起こった出来事ではなく，ユダヤ人がホロコーストに対抗する行動をとれなかったということでもなければ，またとらなかったということでもなかった。さらに言えば，大多数のスロバキア人もまた，単なる受け身の傍観者ではな

(2) Gross, David, *Židovská ročenka pre Slovensko. Jüdisches Jahrbuch für die Slovakei*, Bratislava, 1940, p. 3.

(3) *Ibid*., p. 3.

(4) YIVO Institute for Jewish Research, Papers of Benjamin Eichler (RG 1097), box 1, file 1, Memoirs – Slovak.

(5) エイヒラーの回想録は，1981 年と 1982 年にエイヒラーが寄贈した YIVO ユダヤ研究所で閲覧できる。

(6) YIVO Institute for Jewish Research, RG 1097, box 1, file 1.［脚注 4 に同じ。］

(7) *Ibid.*

かった。大多数のスロバキア人とユダヤ人は，事態を受け止めるだけでなく，意欲的に役割を担って，積極的にホロコーストを共にしたのである。本稿は，エイヒラーの回想録が紋切り型ではない，独自のホロコースト観を示していることを明らかにする[8]。ただし，以下ではエイヒラーの回想録をそれ自体として検討するのではなく，スロバキアのホロコーストでは誰が加害者で，誰が被害者か，そして傍観者は誰かについて幅広く考察することにしよう。（歴史学者ラウル・ヒルバーグ[9]によるこの人間分類は，しばしば批判の的になっているが，これほど優れた分類はない。）マジョリティのスロバキア人とマイノリティのユダヤ人は，この［三分類］図式の中ではどこに位置づけられるのだろうか。『スロバキアにおけるホロコースト（*Holokaust na Slovensku*）』シリーズの編者の一人エドゥアルド・ニジニャンスキーは，マジョリティのスロバキア人とマイノリティのユダヤ人の関係を扱った同シリーズ第7巻の序文で次のように記している。「スロバキアにおけるホロコーストにかんする著作を執筆した内外の著者の大半が描くところによれば，スロバキアのマイノリティとしてのユダヤ人は，マジョリティであるスロバキア人（正確には，フリンカ・スロバキア人民党に代表される指導的エリート）が行政権と立法権の両面からスロバキア独自の反ユダヤ政策を向けたとき，その矛先（ほこさき）になった。」[10] 長らく，「被害者（ユダヤ人）── 加害者（広義には，フリンカ・スロバキア人民党の指導的エリート）── 物言わぬマジョリティ」という区別は変わることがなかったのである[11]。しかし，1970年代に執筆されたエイヒラーの著書は，それとは異なる見解を示し，物言わぬマジョリティと言われる人々の声に耳を傾けている。このことが，ホロコーストとその後にかんする比較的最近の多くの著作とエイヒラーの未公刊の回想録との間の違いになっていると考えられる。この違いをどのように理解すべきであろうか。この違いによって，スロバキア人とユダヤ人についての戦後の心象はどのように描かれることになるのであろうか。本稿では，（おおむね民族として定義された）二つの集団［スロバキア人とユダヤ人］の受動的行動と能動的行動に焦点を当てて，スロバキアにおけるホロコーストにかんする諸々の記憶を考察する。しかし，断定的な答えを出したと主張するつもりはない。ファシズムに抵抗した者にたいする戦後の評価が，スロバキアにおけるホロコーストの諸記憶（複数形であることに留意されたい。）にたいしてどのように影響を与えたかを概観するにすぎない。

1．二種類のスロバキア人

スロバキア国民議会（Slovenská národná rada：SNR）の議長ヨゼフ・レットリヒ（Jozef Lettrich）は，1945年5月15日の本会議を開催するに当たり，「栄えあるスロバキア国民議会の皆様。本日の国民議会本会議は祝賀の場であり，スロバキアの立法権と行政権を革命的に代表する人々が参集した会議として記憶されることになるでしょう。栄光の赤軍が我が祖国を完全解放し，赤軍と連合軍がチェ

（8）Gross, D., *Židovská ročenka* ..., p. 3.［脚注2に同じ。］

（9）Hilberg, Raul, *Perpetrators, Victims, Bystanders: The Jewish Catastrophe, 1933–1945*, New York, NY: Aaron Asher Books, 1992.

（10）Nižňanský, Eduard (ed.). *Holokaust na Slovensku 7. Vzťah slovenskej majority a židovskej minority (náčrt problému). Dokumenty*, [Holocaust in Slovakia 7. The Relationship between the Slovak Majority and the Jewish Minority (Outline of the Problem). Documents,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku – Katedra všeobecných dejín FF UK, 2005, p. 6.

（11）*Ibid.*, pp. 6–7.

コスロバキア共和国の全土を解放して以来，初めてスロバキアの首都ブラチスラバで，重大で責任ある仕事に取り組むためにこの本会議が開かれたからに他なりません。」[12] と祝辞を述べた。

レットリヒの言う「重大で責任ある仕事」とは，スロバキア国民議会が「国民法廷にかんする規則の承認」，正式には「ファシストの犯罪者，占領者，反逆者，協力者の処罰ならびに国民による司法の確立にかんする法律」（1945 年法律第 33 号）の承認であった[13]。レットリヒと同様に本会議で発言した者の多くは，「スロバキア国民が，ミュンヘンからの命令［ミュンヘン協定］を招き寄せた敗北主義的政策に関与したことはなく…… 帝国主義国ドイツの保護下にあったスロバキア［自治政府］とも関係がありません。自治政府は強制によって作られたものであって，ナチズムとファシズムによる偽りの こしらえもの でした。」[14] と強調した。「罪なきスロバキア人」は非民主的なスロバキア自治政府とは無関係であるばかりか，政府に抵抗するために武器を手にすることさえしたという考え方は，レットリヒの同僚である民主党のサムエル・ベルシュ（Samuel Belluš）も繰り返し口にして，次のように述べている。「国民法廷にかんする法律を採択して私たちは世界に示したいと願っていることがあります。それは，チェコスロバキア共和国と同胞たるチェコ国民を裏切ったのはスロバキア国民ではなく，ティソやトゥカのような一握りの手先であったということです。彼らは国民から厳しく正当な非難を受けることになるでしょう。左様，旧政権でトップの公職に就いていた政治家は全員，国民法廷に立たされることになります。敗戦した敵国の手先になって，自由で独立した民主的な生活を営もうとする国民の内面を抹殺しようとした全員，昨年 8 月の蜂起［反独のスロバキア国民蜂起］で見事なまでに証明された我が国民の当然の抵抗精神を抑圧して，野心を遂げようとした全員のことを言っているのです。国民法廷は，全国民が経験した恐怖と辛苦が二度と繰り返されないことを保証するために，これらの裏切り者とその一派にたいして復讐することになるでしょう。」[15]

ベルシュの演説から，国民法廷にかんする法律の採択には，二つの目的があったことが分かる。一つは，世界（とくに西側諸国）に向けて，スロバキア国民と戦時国家とは別物であると示すことであり，二つは，チェコスロバキアの崩壊に責任があるのは「ティソやトゥカのような一握りの手先」であって，スロバキア国民ではないことをプラハに向けて示すことであった。こうして，あれらの人たちは，新しく設置された復讐法廷に立たされることになった。サムエル・ベルシュの演説からの引用で分かるように，もっぱら自国民にたいして行った（とされる）事柄が，旧体制の代表者とその一派による事犯とされた。「自由で独立した民主的な生活を営もうとする国民の内面を抹殺しようとした」ことが罪

（12）*Spoločná česko-slovenská digitálna parlamentná knižnica*, Slovenská národná rada, [Joint Czech-Slovak Digital Parliamentary Library, Slovak National Council,] 15 May 1945. Available online: <http://www.psp.cz/eknih/1945snr/stenprot/003schuz/index.htm>.［ヨゼフ・レットリヒ（1905 年～1969 年）は，親独のフリンカ・スロバキア人民党に抵抗し，スロバキア国民蜂起（1944 年）を指導した一人。政変（1948 年 2 月）により，民主党員の彼はアメリカに亡命。］

（13）Šutaj, Štefan *et al.*, *Prezidentské dekréty Edvarda Beneša v povojnovom Slovensku*, [Edvard Beneš's Presidential Decrees in Post-War Slovakia,] Bratislava: Veda, 2002.

（14）*Spoločná česko-slovenská digitálna parlamentná knižnica*, Slovenská národná rada, 15 May 1945. Available online: <http://www.psp.cz/eknih/1945snr/stenprot/003schuz/index.htm>［脚注 12 に同じ。］

（15）*Ibid.*

とされたのである[16]。スロバキア国民蜂起は，詰まるところスロバキア国民に自由と民主主義が引き継がれ，それへの愛が勝っていたことを示す証拠としての役目を果たすことになった。まるで，戦後のスロバキアには真のスロバキア人を体現するパルチザンとスロバキア国民を裏切った協力者・裏切り者という二種類のスロバキア人がいたかのようであった。しかも，国民のマジョリティはパルチザンであり，敵国の手先は「ひと握り」とされた。

1945年5月15日に演説した人すべてが，単純に，かたや，自由を愛する罪なきマジョリティ，こなた，内面でも外に表れた行動でもまったくスロバキア人らしくない，権力におもねるマイノリティ，という二つにスロバキア人を分けてしまうような演説をしたかと言うと，そうではない。民主党と共産党の何人かの発言者は，「一握り」というのが相対的な概念であることに十分に注意するようにと述べた。たとえば共産党員で内務委員（当時）であったグスタフ・フサーク（Gustav Husák）の舌鋒は，レットリヒよりも鋭かった。フサークの考えによれば，戦時体制は［対外的に］スロバキア国民の評判を失墜させただけでなく，「国内的にも善き品性を台無しにしました。多くのスロバキア国民は品性を貶（おとし）めて，快適な生活や物質的な利益に目がくらんでしまったのです。我が国民は，どのような体制の下で生活するかとか，誰が統治しているのかについては無頓着で，自分たちさえ良い生活ができれば，という心なき国民に成り果てました。」[17]

スロバキア人とユダヤ人との関係にかんする現在の研究では，国民のマジョリティがユダヤ人問題に加担したことが注目され，ニジニャンスキーが指摘するように，国民の多くは快適な生活と物質的利益のために買収されてしまったというフサークの発言の正しさが確証されている[18]。別稿で述べたが，ユダヤ人問題の「解決」にたいするマジョリティの関心は，ユダヤ人資産のアーリア化（あるいはスロバキア化）の片棒を担（かつ）ぐこと「だけ」ではなかった。それ以外の方法でも，躍起になって「ユダヤ人問題」を儲け口にしようとした。たとえば，私的な諍（いさか）いを解決するために「ユダヤ人カード」を切ったこととか，「強制移送されたユダヤ人が残した財産を盗んで競売にかけてまでも，ビジネス上の競争相手や個人的な敵対者を排除して，のし上がるために」，「ユダヤ人カード」を使ったことが明らかになっている[19]。

しかし，戦争直後を一瞥してみると，スロバキア国民蜂起を美化し崇（あが）め奉（たてまつ）るあまり，自国史への批判的な声はかき消されてしまった

（16）*Spoločná česko-slovenská digitálna parlamentná knižnica*, Slovenská národná rada, 15 May 1945. Available online: <http://www.psp.cz/eknih/1945snr/stenprot/003schuz/index.htm>.［脚注12に同じ。］

（17）*Ibid.*

（18）Nižňanský, Eduard, “Typológia vzťahov majoritného obyvateľstva a židovskej minority v období holokaustu,” [“A Typology of Relations between the Majority Population and the Jewish Minority during the Holocaust,”] in: Štefan Šutaj (ed.), *Národnostná politika na Slovensku po roku 1989*, [Ethnic Politics in Slovakia after 1989,] Prešov: Universum, 2005, p. 204.

（19）Kubátová, Hana, *Nepokradeš!: nálady a postoje slovenské společnosti k židovské otázce, 1938–1945*, [Thou Shalt Not Steal: Moods and Attitudes of Slovak Society towards the Jewish Question, 1938–1945,] Praha: Academia, 2013, p. 218.「ユダヤ人カード」というのは比喩的な表現であり，たとえば，利害関係が相反する相手方を排除するとき，「ユダヤ人の友人」というレッテルを貼って排除したことがあった。「ユダヤ人」が功利的に利用され，このような場合には，「ユダヤ人カードを切った」というのである。［ここに「ユダヤ人カード」とは，私利私欲を満たすための万能のジョーカーであり，有無を言わせず相手を屈服させて，利害対立の舞台から排除・退場させるレッド・カードと言ったほどの意味であろう。］

ことが分かる。「第二次世界大戦にかんする言説の中でスロバキア国民蜂起と反ファシスト闘争が優位を占めたが，そのために，スロバキア共和国（1939 年～1945 年）についての大衆の記憶はほぼ完全に後景に退き，政治的に忘れ去られてしまい，『抵抗する人々』『スラブへの帰属』『聖職者ファシストによる弾圧』という特定の物語だけが語られるようになった。」[20] というミロスラフ・ミヘラとミハル・クシニャンの指摘は正鵠を射ている。

換言すれば，ミヘラとクシニャンの言う「抵抗する人々」にかんする選(え)り抜かれた物語の中で重要な役割を果たしたのは，パルチザンとして闘った我らがスロバキア人であった。ユダヤ人の財産にたいする国民のマジョリティの実利から発してスロバキアを席巻した協力（collaboration）の問題は，後回しにされたのである。

2．それで，誰がパルチザンだったのか

最近出版された『国民的英雄とユダヤ人犠牲者 ── ホロコーストにかんするチェコの表象』（2015 年）の中で，著者ペーテル・ハラマは，ホロコーストと第二次世界大戦についての戦後の記憶の中で，ユダヤ人とチェコ人とではその立ち位置が同じではないと指摘している[21]。このことはスロバキアでも同様である。戦争直後には，チェコのレジスタンス闘士やスロバキアのパルチザンが英雄視にされ，その中から国民的英雄が生まれた。だが，ユダヤ人については，恐怖のあまりすくんでしまった無防備な犠牲者という見方が支配的であった。おまけに，受け身の犠牲者であったユダヤ人は第二次世界大戦の様々な記憶からも消えてしまった。ハラマが言うように，「非ユダヤ人のチェコ人やスロバキア人とは対照的に区別されるユダヤ人は，祖国の自由のためとか，特定の政治的理想のために死んだのではない。これは確かである。」[22] 私心なきスロバキア人のレジスタンスが強調されたために，スロバキア国民蜂起に加わったユダヤ人のことは，片隅に追いやられた。すでに述べたように，ユダヤ人は肝の据わったパルチザンとして描かれることがなく，受け身の犠牲者とされてきた。ところが，このテーマにかんする重要な歴史的研究がなされたこともあって，このような描き方は近年かなり変化した。たとえば，国民蜂起へのユダヤ人の参加率は，［ユダヤ人の］人口比を大きく上回っていることが分かってきたからである[23]。それにもかかわらず，第二次世界大戦について戦争直後に書かれたものの中では，スロバキア国民蜂起には民族的な意味があり，それは非ユダヤ人であるスロバキア人による民族的蜂起であったとされてきた。このような語り口で語られていたことを裏付けるのは，スロバキア国民議会のある議員による次のような発言である。スロバキア［自治政府］（1938 年～1945 年）は「我が国民一人ひとりのあらゆる市民権を抑圧」したが，「スロバキア国民は機会を捉えるやただちに，みずからが自国の反逆者はもとより外国の血を引く反逆者とは同類ではないことを決

（20）Michela, Miroslav and Kšiňan, Michal, “Slovenské národné povstanie,” [“Slovak National Uprising,”] in: Michal Kšiňan (ed.), *Komunisti a povstania: Ritualizácia pripomínania si protifašistických povstaní v strednej Európe (1945–1960)*, [Communists and Uprisings: The Ritualisation of Commemorating Anti-Fascist Uprisings in Central Europe (1945–1960),] Kraków: Towarzystwo Słowaków w Polsce, 2012, p. 11.

（21）Hallama, Peter, *Nationale Helden und jüdische Opfer: tschechische Repräsentationen des Holocaust,* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015.

（22）*Ibid.*, p. 146.

（23）Lipscher, Ladislav, *Židia v slovenskom štáte: 1939–1945*, [Jews in the Slovak State: 1939–1945,] Bratislava: Print-Servis, 1992.

然と示した」[24] のであり，「スロバキア国民の立場は反独的であり，ファシズムに抗（あらが）うものであった。」[25] 最近は，スロバキア国民蜂起の矮小化，あるいは蜂起への意図的な中傷が見られる。そのことを勘案すれば，スロバキア国民蜂起が正当にもヨーロッパの反ファシスト運動の中で重要な位置を占めていることは重ねて指摘する必要があるであろう。しかしながら，民族史観とレジスタンスを美化するあまり，戦争末期における解放闘争に果たしたユダヤ人の役割と功績が見落とされてしまったのである。ユダヤ人が抵抗から「意図的に」逃げたとする悪意に満ちた筋立ては，ブラチスラバの国民法廷で検事を務めたスロバキアの弁護士ユライ・シュヤン（Juraj Šujan）の評論の中に見られる。この記事は，戦前の『国民新聞（*Lidové noviny*）』紙の流れを汲むと称する『自由新聞（*Svobodné noviny*）』紙［1945 年 10 月 18 日付］に掲載されている。シュヤンは，「スロバキアにおけるユダヤ人問題」と題する記事で，1945 年 9 月末にトポルチャニー［ブラチスラバの北東約 105キロメートル］で起きた虐殺（ポグロム）を論じた。これは，奪われたユダヤ人財産の返還についてあからさまに反対する記事であり，国民のマジョリティの関心を再び引き寄せることになった。曰く，「国民蜂起によって，ユダヤ人は，蜂起の歴史だけでなく，我々国民の心の中にも金色の文字で刻まれるはずのかけがえない機会を逸してしまった。蜂起が鎮圧された後に，ユダヤ人が，村，町，山岳地帯に潜伏して，戦時を耐え抜き，ありとあらゆる辛酸を舐めたというのであれば，今日（きょうび）日ユダヤ人が傷つけられることは決してなかったであろう。そもそもユダヤ人の財産はユダヤ人に返還されるべきであって，社会から救われるべきは，何はおいてもユダヤ人であるということは誰の目にも明らかとなったことであろう。」[26]

国民蜂起に参加していないとユダヤ人を非難し，それゆえにユダヤ人は財産の返還要求ができないとするシュヤンの言説は，驚くべきものである。その理由は一つだけではない。歴史の現実と矛盾し，論理に反するだけではない。蜂起のほんの数ヶ月前にユダヤ人と蜂起について宣伝していた公式のプロパガンダとも矛盾している。フリンカ警固団［フリンカ・スロバキア人民党の非軍事組織］の過激な定期刊行物『警固（Gardista）』紙から一例を拾い挙げてみよう。「怪獣ボルシェビキは，わが愛するスロバキアをより早く征服するために，パルチザンを産み落とした。その国籍は様々であるが，主要成分はチェコ人とユダヤ人である。」[27] イヴァン・カメネツも，戦時中のプロパガンダが，蜂起，ユダヤ人，チェコ人，ボルシェビズムを結びつけて捉えていたことは間違いないとして，「蜂起のときだけでなく，蜂起軍が軍事的敗北を喫した後にも，『スロバキア人』『警固』『国民新聞』などの政府系新聞は，反ユダヤのヘイト記事を満載していた。」[28] と述べている。ところが，政権交代によってあの呪わしいパルチザンは「我が国」の英雄にして，「スロバキア国民蜂起の輝ける闘士」となった。そのことが旧政権時代に屈従していた国民のマジョリティの一部からも突如として認められたのである[29]。以下で述べるように，レジスタンスをはじめとする，あらゆる反ファシスト的な

（24）*Spoločná česko-slovenská digitálna parlamentná knižnica*, Slovenská národná rada, 15 May 1945. Available online: <http://www.psp.cz/eknih/1945snr/stenprot/006schuz/index.htm>.［脚注 12 に同じ。］

（25）*Ibid.*

（26）*Slobodné noviny,* [The Free Newspaper,] 18 October 1945, p. 1.

（27）*Gardista*, [The Guardist,] 5 October 1944, p. 1.

（28）Kamenc, Ivan. *Po stopách tragédie*, [On the Trail of Tragedy,] Bratislava: Archa, 1991.

事柄が美化されたが，そのことはホロコーストと戦争をめぐる「ユダヤ人」についての記憶にも影響を及ぼすことになった。

1946 年 6 月にラビ,アルミン・フリーダー師(Armin Frieder)が急死し,ユダヤ宗教団体中央連合会（Central Union of Jewish Religious Communities）の代表を引き継いだその弟のラビ，エマヌエル・フリーダー師（Emanuel Frieder）もまた,「抵抗する人々」の物語からユダヤ人を排除しようとする傾向があることを見抜いていた。言うまでもなく，アルミン・フリーダー師は，戦時中に当局に賄賂を握らせてユダヤ人の命を救おうとした，あの「作業部会（ワーキング・グループ）（Pracovná skupina)」［ユダヤ人センター内の非合法組織］に属していた人である。ノヴェー・メスト・ナド・ヴァーホム［ブラチスラバの北東約 97キロメートル］の正統派のシナゴーグなど数ヶ所で，1945 年 8 月にスロバキア国民蜂起一周年記念式典が開催されたが，そこでアルミン・ブリーダー師は,「ナチス下のスロバキア［自治政府］による反ユダヤのプロパガンダは嘘で固められていました。しかし，蜂起には多くの『ユダヤのボルシェビキ』が加担したという一点では正しかったのです。」(30) という話を聞くことができた。

1950 年代末から 1960 年代になると，第二次世界大戦中に迫害を受けたユダヤ人は，次第に，肯定的で普遍的な人間の価値を体現している者として描かれようになった(31)。たとえば，ラディスラフ・ムニャチコの『死，その名は小さな天使』という小説に登場するユダヤ人マルタはそのような人物として描写されている(32)。この傾向は，戦争を取り上げた他の文学作品や映画，あるいは新聞記事とか記念演説でも見て取ることができる。［前出の］ペーテル・ハラマによれば，ユダヤ人がもはや受け身の犠牲者ではないとする人物像の変容は，ユダヤ人を「殉教者」とする考え方と密接に結びついている。その姿は武器を手にした反ファシストの闘士についてのふつうのイメージとは合わないかもしれないが，積極的な活動家であり，進んで犠牲になった人として描かれている。換言すれば,「殉教者」とは，兵士やパルチザンだけではない。何よりもまず人間であり，いかなる悲劇的な損失を被ろうとも，我が運命を自分の支配下においている人のことである。要するに,「殉教者」とは受難の人のことである。そのことに意味があった(33)。

スロバキアのユダヤ人が「気落ちして従容と運命を受け入れるほど弱（よわ）ではなかった」ことは，すでに『スロバキアのユダヤ人の悲劇――写真と文書』（1949 年）の中で強調されている。一例を挙げると，この著書の編者は,「スロバキアのユダヤ人の中から，国民の自由のために闘う著名な戦士が数多く輩出した。これらの人々がナチスの犯罪をいち早く暴（あば）き出したことは称讃に値する。ヒトラー殺人主義との戦争に巻き込まれた世界は，ポーランドの強制収容所で何が起こっているかを知ることができたからである。」(34) と述べた。こ

(29) *Spoločná česko-slovenská digitálna parlamentná knižnica*, Slovenská národná rada, 15 May 1945. Available online: <http://www.psp.cz/eknih/1945snr/stenprot/003schuz/index.htm>［脚注 12 に同じ。］

(30) Frieder, Emanuel. *To Deliver Their Souls: The Struggle of a Young Rabbi during the Holocaust*. New York: Holocaust Library, 1990, p. 244.

(31) Hallama, P., *Nationale Helden* ..., p. 186.［脚注 21 に同じ。］

(32) Mňačko, Ladislav. *Smrt sa volá Engelchen*, [Death is Called Engelchen,] Bratislava: Slovenské vydavateľstvo politickej literatúry, 1959.

(33) Hallama, P., *Nationale Helden* ..., p. 186.［脚注 21 に同じ。］

(34) Steiner, Bedrich a kol., *Tragédia slovenských židov: fotografie a dokumenty*, [The Tragedy of Slovak Jews: Photographs and Documents,] Bratislava: Dokumentačná akcia pri ÚSŽNO, 1949, p. 8.

れと趣旨は同様であるが，第二次世界大戦終結 15 周年に当たって，主任ラビのエリアス・カッツ師は，殺害されたラビのリストを作成して，彼らを「殉教者」と呼んだ(35)。1959 年半ばにジリナ［ブラチスラバの北東約 200キロメートル］とコシツェ［ブラチスラバの東約 400キロメートル］でユダヤ宗教団体中央連合会副議長フランティシェク・コムヤーティ（František Komjáty）の記念講演があったが，その中ではハラマの言う［人物像の］変容をもっとはっきりと確認することができる。コシツェでコムヤーティは，［ユダヤ人の］死者が「胸の悪くなるようななぶり殺しの目に遭って」殺害されたと言った。それだけではない。その血で 1945 年の春（チェコスロバキアの解放）を贖（あがな）ったとも言った。ジリナは，コムヤティの両親，妹，義父母などが収容・集住され，後にはそこから「ガス殺収容所」へと強制移送された土地であったが，まさにその地でコムヤーティは，死者のことを「信仰と民族の殉教者」と述べたのである。その死は犬死ではなかったのだ(36)。

ベンヤミン・エイヒラーは，その回想録の第 10 章で「自ら進んで殺戮者の元には行かずに抵抗した」人々のことを取り上げている。エイヒラーにとって，ユダヤ人は殉教者だけではない。英雄でもあった。彼はその名を挙げて，「これらの人たちは，その一部にすぎないが，ナチズムに対抗した勇敢な闘士である。私は，近隣諸国のユダヤ人に較べれば膨大な人数に上るスロバキアのユダヤ人のヒロイズムに注意を払いたい。」と述べた。『聖書』を引いたエイヒラーは，「『聖書』の中では『主は代々（よよ）アマレク人と戦われる。（Milchamah Adonai Baamalek Medor Dor.［The Lord will be at war against the Amalekites from generation to generation.］）』と言われている」アマレク人ハマンにたいする戦いをナチスとの戦いに擬した(37)。

エイヒラーは，レフィディムでイスラエルの民がアマレク人に勝利したときのことを記している『聖書』モーセ第二書［「出エジプト記」］の次のような くだり を思い起こさせている。「14 主はモーセに言われた。『このことを文書に書き記して記念とし，また，ヨシュアに読み聞かせよ。「わたしは，アマレクの記憶を天の下から完全にぬぐい去る」と。』15 モーセは祭壇を築いて，それを『主はわが旗』と名付けて，16 言った。『彼らは主の御座に背いて手を上げた。主は代々（よよ）アマレク人と戦われる。』」(38)。

エイヒラーの名簿には，ブラチスラバ，ジリナはもとより，バンスカー＝ビストリツァ，バーノフツェ・ナド・ベブラヴウ，レヴィツェ，トレンチン，レヴォチャ，トポチュニアニ，ルチェネク，フメンネ，スニナ，コシツェ，プレショフ，ニトラ，フロホヴェツ，ドゥナイスカー・ストレダ，ノヴェ・ザームキ，バルデヨフなどにいた数十人のユダヤ人戦闘員とレジスタンスの戦闘員の名前がある。このことから，彼は様々な都市を巡り，名簿を拡充し続けたことが分かる。また，「徴兵

（35）Katz, Eliáš. *Cedry Libanonu: na nehynúcu pamiatku umučených velikášov židovstva a 110.000 občanov židovského vyznania zo Slovenska 1942–45*, [Cedars of Lebanon: To the Undying Memory of the Martyred Giants of Judaism and 110,000 Jewish Citizens of Slovakia 1942–45,] Nitra: Židovská náboženská obec v Nitre, 1961.

（36）*The Central Archives for the History of the Jewish People Jerusalem*, fond Franz Komjati, P223/9.

（37）YIVO Institute for Jewish Research, RG 1097, box 1, file 1.
［ハマンは『旧約聖書』「エステル記」3 章 10 節（日本聖書協会新共同訳『聖書』，766 頁）に「ユダヤ人の迫害者」として登場する。］

（38）Exodus, 17: 14–16, NIV. 『旧約聖書』「出エジプト記」（日本聖書協会新共同訳『聖書』）17 章 14 節～16 節，122 頁～123 頁。［引用文冒頭の下付数字は上記訳書の節番号。］

などの強制によらず，志願してナチスと闘い，強制収容所で虐殺されずに，何らかの仕方で抵抗したユダヤ人について知っている」人がいれば，その名前を明かして欲しいと呼びかけた[39]。

すでに述べたように，エイヒラーの回想録が興味深いのは，戦時中のスロバキアのマジョリティによるユダヤ人（とユダヤ人問題）への態度を単純には割り切っていないからである。スロバキアにおけるホロコーストを扱った多くの他の著作とは異なり，エイヒラーの回想録では，大多数のスロバキア人がホロコーストの先棒担ぎだったとされている。ただし，ここで念頭に置いておかなければならないことは，エイヒラーが回顧録を執筆したのは，多分亡命生活を送っていた 1970 年代初頭であり，おそらく自由な時代であった「プラハの春」からの影響を受けていたであろうということである。当時は，国民の協力（collaboration）という問題など，ある種の微妙な問題が一気に解き放たれていたのである[40]。

ここで，スロバキア人とユダヤ人の関係についてのエイヒラーによる考察に戻ることにしよう。エイヒラーは，「非ユダヤ系のスロバキア人の大多数が，ユダヤ人のことを，スロバキアのお客さんであり，追放できる（追放すべき）存在であるか，もしくは完全な市民権を持たない二級市民であるとしか考えていなかった。」と主張している[41]。チェコと較べてみても，スロバキアが返還法を採択するのには非常に長い時間を要した。それは次のような事実と関係している。すなわち，「屈従したスロバキア国民の多くが，ユダヤ人の国外追放，アーリア化などによるユダヤ人からの強奪，ユダヤ人の迫害（残酷な扱いなど）に直接加担した［という事実である］。…… スロバキアでは，完全な非ナチス化が行われたことは一度もない。みずからの意思でユダヤ人を捕縛して，機会を捉えては『勤勉なまでに』殴りつけ強奪し，家畜運搬車に乗せて，ドイツ軍に引き渡して殺させるような，卑(いや)しい『志願兵』たちのことが脳裏をよぎる。…… ユダヤ人の財産を盗んだこのような泥棒があまりにも多かったからである。」[42]

余談だが，「協力（collaboration）」という言葉の意味合いは，言語によって異なっていが，それは，歴史的背景の違いに由来するものであろう。この言葉が非難の意味［「利敵」とか，「敵国内通」という意味］を持つようになったのは 1939 年以降のことで，現在ではほとんどの解説書や辞典が，その典型例としてヴィドクン・クヴィスリンク（Vidkun Quisling）［ノルウェーの「協力者」］やフィリップ・ペタン（Philippe Pétain）［フランスの「協力者」］の名を挙げている。たとえば 1996 年にポーランドで出版された『政治用語辞典』では，「協力（collaboration）」とは（政治，文化，その他のあらゆる形態で）第二次世界大戦中に占領軍に自発的に幇助(ほうじょ)すること（to cooperate）と定義されている。また 1999 年にポーランドで出版された『政治学事典』によれば，「協力者（collaborator）」という用語は，ポーランドでは，1981 年 12 月の戒厳令［独立自主管理労働組合「連帯」などへの対抗措置］を善しとした政治エリートも指すとされている[43]。また，チェコで出

（39）YIVO Institute for Jewish Research, RG 1097, box 1, file1.［脚注 4 に同じ。］

（40）Holý, Jiří, “The Six Versions of The Shop on Main Street,” in: Jiří Holý (ed.), *Aspects of Genres in the Holocaust Literatures in Central Europe*, Praha: Akropolis, 2015, pp. 97–113.

（41）YIVO Institute for Jewish Research, RG 1097, box 1, file 1.［脚注 4 に同じ。］

（42）*Ibid.*

（43）See Bankowicz, Marek (ed.), *Słownik politiky*, [Dictionary of Politics,] Warszawa: Wiedza Powszechna, 1996, p. 113; Antoszewski, Andrzej and Herbut, Ryszard

版された何冊かの辞典では，「協力者（collaborator）」は「占領軍に協力した裏切り者の呼称」とされている[44]。しかし，比較的新刊の辞典では，「協力（collaboration）」がもう少し広く定義されている。たとえば，『外来語学術辞典』（2001 年）によれば，「協力」とは，「統治している敵（占領者）との（公然・非公然の）恥ずべき（通常は自発的な）幇助（cooperation）」となっている[45]。『現代スロバキア語辞典』（2011 年）はさらに踏み込み，「協力」の意味を「国内の非民主的支配体制」への自発的幇助（willing cooperation）にまで拡張している[46]。

閑話休題。あのような白か黒かの二分法を避けて，エイヒラーは回想録の第 11 章を「自由なき迫害の時代にユダヤ人」を助けた人々に捧げている。彼には，「積極的なユダヤ人戦闘員」の完璧な名簿の作成が不可能であることは分かっていたが，「迫害の時代にユダヤ人を助けた非ユダヤ人の完璧な名簿の作成」もまた不可能であることを十分に承知していた[47]。彼は，作成した不完全な名簿から 22 人を抜き出し「正義の人（tsadikim）」と名付けた。その上で，エイヒラーは，「非ユダヤ人に救われたおかげでヒトラーの迫害を生き延びたユダヤ人は，感謝の念をもって，その非ユダヤ人の人たちの名簿を完成させるために，エルサレムのヤド・ヴァシェム（Yad Vashem）にその名前を申し出て欲しい。」と要請した[48]。本稿で示したように，長い年月が経った今日でも，エイヒラーがその回想録で採用した白黒二分法ではない方法論は，私たちに多くを示唆している。彼の未発表の回顧録に登場するユダヤ人と非ユダヤ人は，機に臨んで変に応じた。ホロコーストを目撃したエイヒラーが書いているのは，彼らの沈黙と受け身の姿勢だけではない。［権力への］協力と抵抗（collaboration and resistance）のことも書いている。戦後になると，国民蜂起やパルチザンなど，ファシストに抗したあらゆる事績が称賛されるようになった。そのような賛美は，スロバキアにおけるホロコーストの記憶にどのような影響を与えたのであろうか。冒頭で述べたように，本稿はそのことを大まかに述べたに過ぎない。戦後になると，「抵抗する人々」の話は，第二次世界大戦を語るときの主要な話題になったが，スロバキアでは，それには今なお微妙な「協力（collaboration）」の問題が付きまとっている。スロバキアの民族史観は，受け身の犠牲者としてのユダヤ人やファシズムによる無名の犠牲者（スロバキアのマジョリティはこれとは無関係であった）を型どおりに取り上げたが，それと相まって，戦後スロバキアの指導的ユダヤ人に影響を与え，内なるヒロイズムに目を向けさせることになった。スロバキアには大勢のパルチザンとわずかな裏切り者がいたという戦後生まれのスロバキア人二類型説は，今日まで生きながらえていると私は見ている。それと並んで，それとは別の少なくとも二つの記憶が生き残っている。その一つは，私たちスロバキア人に言い伝えられた第二次世界大戦の記憶であり，これを象徴しているのは，1992 年以来，国民の祝日と

(eds.), *Leksykon politologii*, [Lexicon of Political Science,] Wrocław: atla2, 1999, p. 207.

（44）Rejiman, Ladislav (ed.), *Slovník cizích slov*, [Dictionary of Foreign Words,] Praha: Státní pedagogické nakladatelství, 1966, p. 177.

（45）Petráčková, Věra and Kraus, Jiří (eds.), *Akademický slovník cizích slov*, [Academic Dictionary of Foreign Words,] Praha: Academia, 2001, p. 396.

（46）Jarošová, Alexandra and Buzássyová, Klára (eds.), *Slovník súčasného slovenského jazyka H-L*, [Dictionary of Contemporary Slovak Language H-L,] Bratislava: Veda, 2011. Available at http://slovnik.juls.savba.sk (quoted on 25 October 2015).

（47）YIVO Institute for Jewish Research, RG 1097, box 1, file 1.［脚注 4 に同じ。］

（48）*Ibid.*

なっている［スロバキア国民］蜂起の勃発記念日（8 月 29 日）である。二つ目は，ホロコーストの記憶である。しかし，これはまだ私たち国民の記憶としては定着していない。

文　献　等

文書館

Spoločná česko-slovenská digitálna parlamentná knižnica [Joint Czech-Slovak Digital Parliamentary Library] (Available online)

The Central Archives for the History of the Jewish People Jerusalem

YIVO Institute for Jewish Research

定期刊行物

Gardista [The Guardist]

Slobodné noviny [Free Newspaper]

参考文献

Antoszewski, Andrzej a Herbut, Ryszard (eds.), *Leksykon politologii,* [Lexicon of Political Science] Wrocław: atla2, 1999.

Bankowicz, Marek (ed,), *Słownik politiky*, [Dictionary of Politics,] Warszawa: Wiedza Powszechna, 1996.

Frieder, Emanuel, *To Deliver Their Souls: The Struggle of a Young Rabbi during the Holocaust,* New York Holocaust Library, 1990.

Gross, David, *Židovská ročenka pre Slovensko. Jüdisches Jahrbuch für die Slovakei*, Bratislava, 1940.

Hallama, Peter, *Nationale Helden und jüdische Opfer: Tschechische Repräsentationen des Holocaust*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015.

Hilberg, Raul, *Perpetrators, Victims, Bystanders: The Jewish Catastrophe, 1933-1945*, New York, NY: Aaron Asher Books, 1992.

Holý, Jiří, “The Six Versions of The Shop on Main Street,” in: Jiří Holý (ed.), *Aspects of genres in the Holocaust literatures in Central Europe*, Praha: Akropolis, 2015, pp. 97−113.

Jarošová, Alexandra and Buzássyová, Klára (eds.), *Slovník súčasného slovenského jazyka H-L*, [Dictionary of Contemporary Slovak Language H-L,] Bratislava: Veda, 2011. Available online: <http://slovnik.juls.savba.sk>

Kamenc, Ivan. *Po stopách tragédie*, [On the Trail of Tragedy,] Bratislava: Archa, 1991.

Katz, Eliáš. *Cedry Libanonu: na nehynúcu pamiatku umučených velikášov židovstva a 110.000 občanov židovského vyznania zo Slovenska 1942-45*, [Cedars of Lebanon: To the Undying Memory of the Martyred Giants of Judaism and 110, 000 Jewish Citizens of Slovakia 1942-45,] Nitra: Židovská náboženská obec v Nitre, 1961.

Kubátová, Hana, *Nepokradeš!: nálady a postoje slovenské společnosti k židovské otázce, 1938-1945*, [Thou Shalt Not Steal: Moods and Attitudes of Slovak Society towards the Jewish Question, 1938-1945,] Praha: Academia, 2013.

Lipscher, Ladislav, *Židia v slovenskom štátě: 1939-1945*, [Jews in the Slovak State: 1939-1945,] Bratislava: Print-Servis, 1992.

Michaela, Miroslav and Kšiňan, Michal, “Slovenské národné povstanie,” [“The Slovak National Uprisings,”] in: Michal Kšiňan (ed.), *Komunisti a povstania: Ritualizácia pripomínania si*

protifašistických povstaní v strednej Európe (1945-1960), [Communists and Uprisings: The Ritualisation of Commemorating Anti-Fascist Uprisings in Central Europe (1945-1960),] Kraków: Towarzystwo Słowaków w Polsce, 2012, pp. 8–35.

Mňačko, Ladislav. *Smrt sa volá Engelchen*, [Death is Called Engelchen,] Bratislava: Slovenské vydavateľstvo politickej literatúry, 1959.

Nižňanský, Eduard (ed.). *Holokaust na Slovensku 7. Vzťah slovenskej majority a židovskej minority (náčrt problému). Dokumenty*, [Holocaust in Slovakia 7. The Relationship between the Slovak Majority and the Jewish Minority (Outline of the Problem). Documents,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku – Katedra všeobecných dejín FF UK, 2005.

Nižňanský, Eduard, "Typológia vzťahov majoritného obyvateľstva a židovskej minority v období holokaustu," ["A Typology of Relations between the Majority Population and the Jewish Minority during the Holocaust,"] in: Štefan Šutaj (ed.), *Národnostná politika na Slovensku po roku 1989*, [Ethnic Politics in Slovakia after 1989,] Prešov: Universum, 2005.

Petráčková, Věra and Kraus, Jiří (eds.), *Akademický slovník cizích slov*, [Academic Dictionary of Foreign Words,] Praha: Academia, 2001.

Rejiman, Ladislav (ed.), *Slovník cizích slov*, [Dictionary of Foreign Words,] Praha: Státní pedagogické nakladatelství, 1966.

Steiner, Bedrich a kol., *Tragédia slovenských židov: fotografie a dokumenty*, [The Tragedy of Slovak Jews: Photographs and Documents,] Bratislava: Dokumentačná akcia pri ÚSŽNO, 1949.

Šutaj, Štefan a kol., *Prezidentské dekréty Edvarda Beneša v povojnovom Slovensku*, [Edvard Beneš's Presidential Decrees in Post-War Slovakia,] Bratislava: Veda, 2002.

＊　＊　＊　＊

原著者（Hana Kubátová）の最近の業績としては，以下がある（訳者）。

Hana Kubátová and Michal Kubát, "The Priest and the State: Clerical Fascism in Slovakia and Theory," *Nations and Nationalism*, Volume 27, Issue 3, July 2021.

Natalia Aleksiun and Hana Kubátová (eds.), *Places, Spaces, and Voids in the Holocaust,* (European Holocaust Studies, Bd. 3), Juni 2021.